

理解と表現を融合する古典群読授業の実践

片 桐 史 裕*

(平成28年8月23日受付；平成28年11月4日受理)

要 旨

古典作品の世界を味わい、感じとるために、作品理解のための授業の後に、群読を用いた音声言語による表現の時間を設けた。文章解釈が中心の高等学校国語科古典授業の中で、授業進度を他の担当者と合わせている場合、表現の時間を設けることは、解釈の時間を削って充てなければならないということになる。群読のシナリオを全て作らせることはとても時間がかかったり、人前で発表する場合は恥ずかしさのあまりすぐに発表できなかつたりして、時間が無為に過ぎることがよくある。しかし、作品の一部分のシナリオを作成することにしたり、ICレコーダーに録音する発表方法を採用することにより、1時間の授業ながら効果のある群読授業をおこなうことができた。また、ICレコーダーで録音し、自らの作品を聞くことにより、学習の成果を客観的にふりかえることができた。

KEY WORDS

群読 音声言語表現 理解 高校 国語 古典 ICレコーダー

1 はじめに

文部科学省(2004)は、「音読によって、国語力や独創力とかかわる脳の場所が特に活性化するという脳科学の知見もあることから、積極的に音読を取り入れていくことが大切である。また、音読することによって、漢字の読みを覚えたり、文章の内容を確実に理解したりできる。」として、音読による文章内容理解の有効性を述べている⁽¹⁾。音読が文章内容理解に及ぼす影響に関して、高橋(2013)は過去の研究を比較し、発達段階により理解を促進するのは成人においては黙読、児童においては音読であると示している⁽²⁾。音読が物語の内容理解に及ぼす影響に関しては、内田(1975)のものがある⁽³⁾。内田は5歳児に対して物語を①教示によって一文毎に声に出し復唱させた場合(外言群)、②同じく心の中で復唱させた場合(内言群)、③ただ聞き取るだけの場合(統制群)では、意味理解や記憶成績は③よりも①、②の方が向上したとしている。また、田中(1983)は、内田(1975)の①「外言化」は他人に聞こえる声で声を出すので、伝達意図が生起し、不適切とし、不自然に大きな声を強制しない「ツブヤキ」をさせることで調査をおこなった⁽⁴⁾。その結果、「ツブヤキ」は内言化、外言化以上に物語の因果関係の把握を促進したと示した。どちらにせよ、音声言語化することによって、言語理解が促進されていることを明らかにしている。

以上の研究において「理解」とは、「文章の意味内容を把握する」という意味合いが濃い。物語文であったら、「人物関係やストーリーがわかった」ということである。しかし物語を理解するということは、人物関係やストーリーだけではなく、文字で書かれてない言外の表現も汲み取って読み取ることも必要になる。先に示した文部科学省(2004)の「第3 望ましい国語力の具体的な目安、2「聞く力・話す力・読む力・書く力」の具体的な目標、(3)「読む力」について、2)文学的な文章において、気持ちや感情を十分に読み取ることができる」では、「①様々な描写をとらえ、内容を的確に理解できる。②登場人物に感情移入し、その心情を理解できる。③比喩的、多義的、含意的な文章表現を読み味わうことができる。④書き手の思考や心情などに迫ることができる。」と示されている。これらと音読の関連について、小塚ら(1982)は、「文章を「声に出して読む」ことは、活字の羅列にしか過ぎない静的、物的な文面の文章を音声化によって生き返らせ、読む者、聞く者が肉声を通して実感することでもある。ある語句を音声化することで、意味の理解が明確になることがある。物語の一場面が、音読によっていっそうはっきりとイメージ化できるときもある。このように読みの理解を深めたり、味わいに彩りを与えたりすることにも音読・朗読は役だつ。」として、「声に出して読む」音声言語表現は行間を味わう効果があると述べている⁽⁵⁾。

授業実践において音読、朗読とともに音声言語表現活動として群読がある。高橋(1990)は群読の定義を木下順二の言葉を借り、「複数の読み手による朗読」とし、それに加えて「複数の読み手が必然的に求められる作品や箇所を

*上越教育大学(学校教育学系)

複数で読むということ」としている⁶⁾。また、中嶋(1997)は、「群読とは、一人一人の朗読を生かすとともに声の強弱・速度、そして男女の声質や人数の調整によって作り上げていく読みである。」と定義している⁷⁾。いずれにせよ朗読が基本となっている音声言語表現活動である。群読を国語教育に取り入れる効果として高橋(1990)は、学習者が作品の文脈を解釈することにより群読作品を作り上げなければならないとし、中嶋(1997)は群読を表現することで作品内容理解を深めさせる取り組みを示している。

以上のことをまとめると、声を出すことは、文章内容理解の手助けとなり、朗読や群読のような音声言語表現は文章に書かれてないことも理解できる、または味わう活動となることが言える。本論文ではこれらをもとに、群読を用いた国語科古典授業で、理解と表現を融合させ、作品世界を感じとることを目的とした授業実践を示すものである。

2 授業の目的と展開

2. 1 表現活動の実際

高等学校国語科古典の授業では、古典文章の解釈が中心となる授業が大半となる。毎授業時間音読の時間は設けるが、学習者は人物設定、時代背景を理解し、辞書を引いてわからない語を調べてストーリーを理解しようとする。それらの学習は時間がかかるため、文章解釈の学習で授業時間が終わる場合がほとんどとなる。他の授業担当の先生と進度を合わせている場合、テスト範囲の教科書単元のことを考えると、自分の担当クラスだけ遅れるわけにもいかず、文章解釈の学習の後、内容を体感する表現活動を取り入れることは難しい。文章理解がなされていないければ、表現活動をして活動から何も生み出せないからだ。

表現活動を取り入れるにしても、表現を発表する時間を設けなければ、学習者個人内の活動となり、表現する意味がなくなってしまう。表現とは自分ではない「外」の存在に対して表出することで「表現」となるからである。そのためには作品を理解して練習する時間、発表する段取りを理解させ、他者に向かって発表する時間を設ける必要があるのだが、授業時間1時間でそれらを完結できることは難しく、2～3時間以上は確保しなければいけないのが現状である。その時間を確保できないということで表現活動を見送る現実がある。そこで授業時間を十分に確保できない中でも、効果ある表現活動を取り入れられる実践が必要となる。

2. 2 表現活動の目的

本実践は、授業時間を十分に確保できない中でも、1時間の中に群読の練習の時間、群読のシナリオ創作の時間、発表の時間を組みこみ、効果ある表現活動を導入し、学習者の作品理解と表現を融合させ、作品世界を体感させることが目的である。1時間で目的を達成するための工夫点は次の3点である。

- 1) 群読シナリオの大半は授業者が用意し、作品の結末部分(登場人物の主張が顕著に現れている部分)のシナリオは学習者たちが創作することで全てのシナリオを創作しなければならないときと比べて、時間が短縮されるようにした。
- 2) レコーダーに音声を録音し、発表の時間に流して他のグループと違いを比較することで、作品の読み取り、表現の違いを比較できるようにした。
- 3) レコーダーに音声を録音してそれを流すという発表にしたことにより、学習者が発表時に恥ずかしがってすぐに発表できないという時間のロスを無くし、短時間でも全員の群読作品を聞いてもらえるように工夫した。

2. 3 授業の展開

2. 3. 1 実施期間・対象・授業展開・記録方法

単元内容：『更級日記』、「源氏の五十余巻」

対象：新潟県内公立高等学校2年生41名

内容理解の授業：2016年1月 計4時間

1時間目 範読、連れ読み、斉読、ワークシートを用いた内容解釈

2～4時間目 ワークシートを用いた内容解釈

表現の授業：2016年3月 1時間

記録：「表現の授業」においてのみ、ビデオを教室全体を撮影できるように1台教室前方に設置して記録した。

2. 3. 2 内容理解の授業の詳細

『更級日記』内容授業の詳細は以下の通りである。

- (ア) 学習者は授業前に各自で本文の予習をする。予習は古文の現代語訳である。予習を施したノートは授業前に授業者に提出し、確認を得る。
- (イ) 3人～4人のグループになる。
- (ウ) 目標は「みんながワークシートの()内を理解して埋められるようになる。」と伝え、「理解する」ということは、「どうしてそのようになるのか説明することができる。」ということだと話し、「答え」がワークシートに記入されていればいいということではないことを徹底する。
- (エ) 授業でその時間に行う範囲の本文が書かれた図1のようなワークシートが配られ、学習者はそのワークシートの空欄を補充するために、同じ班の学習者や、別の班の学習者と不明な点に関して情報を提供してもらったり、協働して考える。学習者は予習してきた自分のノートを確認したり、予習では不十分なところを辞書を引いたり文法書を見たりして埋めていく。
- (オ) 教室前面の黒板には授業者が用意した「正解」が貼られてあり、学習者は必要に応じてその「正解」を見にいて理解を進める。
- (カ) 授業者は机間巡回をして、学習者から質問が出た場合、その場で答えることはせず、再考を促したり、黒板に問いの形で記載する。それを見た他の授業者は答えられそうな場合、自ら解答を記入しに行く。このようにして自主的にクラスみんなで解釈し、理解しようという雰囲気をつくり出す。
- (キ) グループメンバー全員が「理解した」となった場合、黒板にあるグループナンバーに印を付ける。不明点がある学習者は印の付いたグループに所属している学習者が「理解」しているとわかり、気軽に質問しに行くことができる。
- (ク) 各時間グループワークの時間を20～30分取り、その後授業者が時間内に解決できなかった不明点を学習者から聞き出し、確認する。

このようにして単元の最後まで解釈を進めていく。目指しているのは、「自ら不明点を探し出し、自ら解決する」という姿勢である。学習者はとすると「問い」を与えられるのに慣れてしまって、その答えを知るとそれで学習を終わりにしてしまう傾向がある。自ら不明点を探し出す姿勢を作ることで、その不明点が解明されても、新たにわからないところを探し出すことが多層的な学びに繋がるからである。

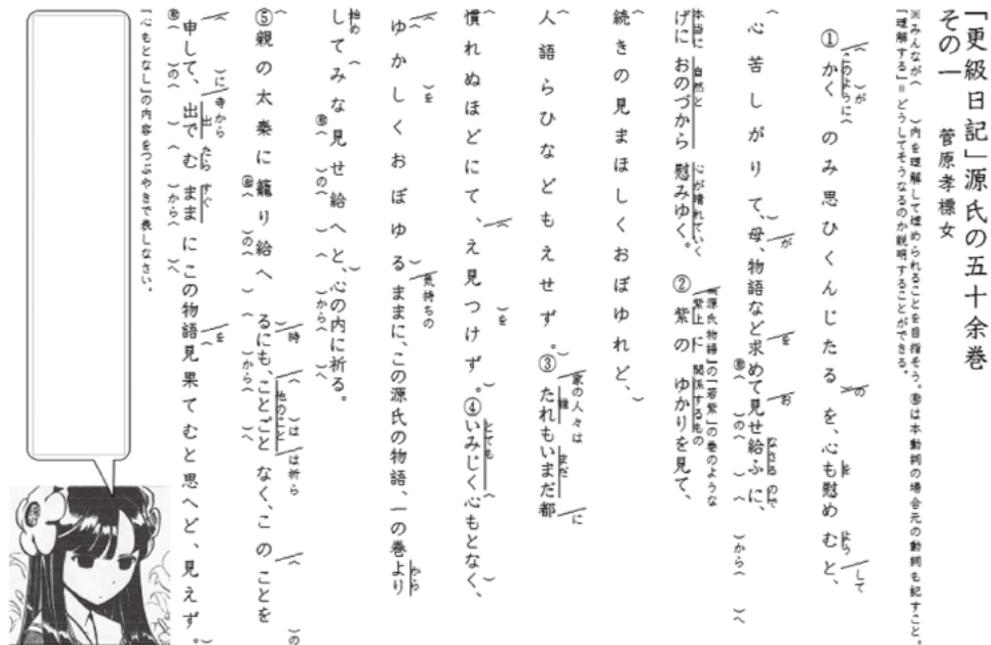


図1 授業で用いるワークシート

⑤「録音技術がうまい。」というのは、学習者は自分の声を録音して聞くという経験が少ないため、せっかく吹き込んででもマイクに音が乗らないということがあり得るため、「ちょっとでも吹き込んで自分たちで聞いてみるように。」と指導し、どのくらいの声の大きさが必要かを本番前に経験させた。

3 結果

3. 1 学習者の活動

学習者は創作、練習、収録のための35分間、時間を惜しんで活動をおこなっていた。グループ活動の概要は次の通りである。なお、グループ名は仮にA～Fとする。

0分～ プリントを読み、授業内容を把握し、シナリオをグループで話し合い決定する。

25分～ グループA、Dがシナリオを完成させ練習をし始める。

27分～ シナリオが完成したグループB、E、Fが机があると学習者同士が近づけないということで席から離れ、教室の空いている部分に集まり、練習する。

28分～ グループDも学習者同士で近寄るために、机から離れ、教室後ろに集まって練習する。

29分～ グループAは机をよけ、座った状態で近づき、録音を始める。

31分～ グループCはシナリオが完成し、席を立ち、練習し始める。

35分 全てのグループは収録が完了し、レコーダーを提出する。

3. 2 考察と分析

3. 2. 1 時間配分について

6グループ中5グループが活動開始後27分までにはシナリオが完成し、練習を始めている。1グループだけ、シナリオ完成が遅くなり、練習し始めたのは31分からである。シナリオ作成の本文は1文であったが、授業者の予測以上の時間がかかってしまった。シナリオ作成が初めてであり、慣れていなかったせいもあるだろう。しかし、未完成のグループはなく、作品を提出できなかったグループもなかった。

27分後から練習したとすると、収録の時間は8分である。31分から収録したグループCは1度しか収録できなかったが、他の班は全て2回収録している。

今回の活動時間は35分としたが、全グループが2回収録できる時間を確保したかった。また、余裕をもって3回収録できれば申し分なかった。時間配分としては、40分は欲しかったところである。各群読の収録時間が平均して1分10秒～1分20秒であるので、6班全ての群読を流したとしても、10分以内に収まる計算となる。よって発表の時間を15分から10分にして活動の時間を確保する必要があった。

3. 2. 2 レコーダーを用いた発表について

レコーダーを用いることにより、自分たちの群読作品を客観的に見ることができたといえる。それはほとんどのグループが2回収録しているからである。1度目の収録に満足できず、2度目をおこない、2度目の群読作品を流して欲しいと言っているということは、どちらの作品がいいのかを客観的に見ているということである。これは、人前で発表する際には失敗したら時間が足りない場合再演ができないというデメリットを解消できているということである。自分たちで「失敗した」と判断すれば、収録し直せるということ、自分たちで満足した作品を完成品として提出できるということになる。

また、図3のように、レコーダーを中心に学習者同士が近寄ることで学習者同士の距離感が緊密になったといえる。最初は席に着きながら録音するが、レコーダーが音を拾わないため、机越しに顔を近づけたり、机のないところに集まって録音したりという工夫をおこなうことによって、緊密になっ



図3 レコーダーの近くに集まる

ていくことがわかる。これは人前に並んで発表するという場にはないことである。

音声を上手に録音するための工夫として、

- 1) 手に持ったレコーダー中心に輪になって集まる
- 2) 机に置いたレコーダー中心に輪になって集まる
- 3) 1人がレコーダーを手に持ち、ソロパート（群読で1人が声を発するパート）の人にレコーダーを向け、ソロパートが代わる毎にレコーダーをその人に向ける。
- 4) 壁や黒板際にレコーダーを置き、壁や黒板の音の反射も利用して音声をクリアーに録音する（図4）。
- 5) レコーダーを遠ざけたり近づけたりして音の臨場感を演出する。

などの方策が見受けられた。



図4 録音に黒板の反射を利用する

3. 2. 3 オリジナルシナリオについて

この作品で主人公の気持ちが詰まっている表現は最後の「後の位もなにかはせむ」である。この作品が書かれた平安時代女性の最高地位である「后」の位は「『源氏物語』」を手に入れて読み耽っている気分には比べたら取るに足りない」という主人公が今までに感じたことのない最高の気分を味わっているという表現である。ここの部分を学習者はどのように群読シナリオにしているのかを集計すると、1人が演じているグループが3グループ、全員が演じているグループが3グループと半々に別れた。1人が演じている場合は、その前の部分「引き出でつつみる心地」は複数人数で演じ（表1）、全員で演じている場合は、その前の部分を1人、もしくは数人で演じている（表2）。このように前と差を付けることによって1人で演じていても全員で演じていても、どちらもこの部分を際立たせるためには有効な群読技法である。この最後の「後の位も……」が特別な表現であると学習者は理解し、演じていることがわかる。

表1 「後の位も……」を1人で演じている※a, b, c～は演者

a c e	はしる, はしる, わづかに見つつ
d f	心も得ず, 心もとなく思ふ源氏を,
e	一の巻よりして, 人もまじらず,
a b	几帳の内にうち伏して引き出でつつみる心地
a	後の位もなにかはせむ。

表2 「後の位も……」を全員で演じている※a, b, c～は演者

a g	はしる, はしる,
a b g	わづかに見つつ
a b c g	心も得ず,
a b c d g	心もとなく思ふ源氏を,
a b c d e	一の巻よりして,
a b c d e f	人もまじらず,
全員	几帳の内にうち伏して
b	引き出でつつみる心地
全員	後の位もなにかはせむ。

このように、理解した作品世界を表現に繋げられている。少しの部分でもオリジナルシナリオを作成することは、他者との表現の違いを確認することもでき、学習者の作品理解について確認することもできる。授業者が用意したシナリオ通りに演じさせるだけでは、シナリオを作った授業者の作品世界観が学習者に伝わるだけで、学習者の作品世界観は生み出されない。オリジナルシナリオ作成の必要性がわかる。

4 今後の課題

音読、朗読、群読などの国語科音声言語活動の研究、授業実践記録は、作文を初めとする文字言語表現活動に比べると非常に少ないといえる。同じ音声を使った集団による表現活動である合唱は各学校で必ずといっていいほど取り入れられているが、群読はその存在を知らない学校教師もたくさんいる。筆者は全国各地で群読の講習会や実践発表を教員向けにおこなっているが、一度経験すると、とても取り入れやすく、合唱が苦手な児童、生徒でも声を出すだけの群読ならできそうだという感想をたくさん耳にした。

このように、学習効果は期待できるのだが、導入されていないというのは、

- 1) 他の活動に比べて、群読が知られていない。
- 2) 群読の指導法があまり伝わっていない。
- 3) 群読の効果が知られていない。

などの理由が考えられる。よって本論文のように手軽に導入し、その効果を示したものを発表することは意義があることだし、今後も続けていかなければならないことである。

群読は集団による活動である。他の学習者と声を合わせるという活動により、所属感、一体感、達成感、自己有用感などの道徳的な面への影響も考えられる。クラスづくりに群読を取り入れている実践者も多い。そういった視点からの研究アプローチも必要である。

また、作品理解に基づいたオリジナルシナリオ作成という観点からも研究を進め、学習者の理解内容と表現方法のつながりを観察、分析することは、作品をどのようにメタ認知しているのかということをも明らかにする上で役立つ。群読の技法には漸増法や追いかけなど、様々なものがあり、学習者が作品のどのような場面でどんな技法を使うのかも分析する必要がある。

そして前述のように作品理解から群読表現活動への影響、逆に、群読により表現されたものから作品理解への影響という両面から分析することで、理解と表現の融合により生み出されるものについて明らかにする必要がある。

【参考引用文献】

- (1) 文部科学省：「これからの時代に求められる国語力について」、2004。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm (2016.7.19閲覧)
- (2) 高橋麻衣子：「人はなぜ音読をするのか－読み能力の発達における音読の役割－」, 95-111, 教育心理学研究, 第61巻, 2013.
- (3) 内田伸子：「幼児における物語の記憶と理解に及ぼす外言化・内言化経験の効果」, 87-96, 教育心理学研究, 第23巻, 1975.
- (4) 田中敏：「幼児の物語理解を促進する効果的・物語言語化の喚起」, 1-9, 教育心理学研究, 第31巻, 1983.
- (5) 小塚芳夫・川上繁：「小学校国語科指導法シリーズ・6 理解と表現に役立つ音読・朗読の指導」, 第21巻, 光村教育図書株式会社, 1982.
- (6) 高橋俊三：「授業への挑戦67群読の授業－子どもたちと教室を活性化させる－」, 236, 明治図書出版株式会社, 1990.
- (7) 中嶋真弓：「理解と表現の一体化を目指して－『平家物語』の群読学習を通して－」, 144-152, 読書科学, 第41巻, 第4号, 1997.

Practice of “gundoku lesson” for fusing the understanding and representation

Fumihiro KATAGIRI*

ABSTRACT

For feeling the world of classical literary works, Teacher carried out the lesson of voice activity, “Gundoku” after the sentence interpretation. High school classic lesson is only interpretation. Teachers must match the speed to go with the others. It is difficult to provide a time of voice activity. So, the students made a partial scenario, and recorded their voice. It was carried out effective announcement meeting in one lesson.

* Joetsu University of Education (Professional Degree Program)